

憑依狂言【サンプル】

茶倉に風邪をもらっちゃった。

先週からずっと具合が悪い。熱は上がったり下がったりを繰り返して、何をしてもだるくて出かける気がしねえ。いちばち有休掛け合ったら思いのほかあっさり許可がでた。アイツなりに看病された恩を感じてんのかも。いやねえか。枕元に伏せたスマホが鳴る。小窓にセフレの名前が表示されたのを確認後画面をタップ。

「もしもし……」

『理一か？ 俺だけど。最近どうしたの、全然店にこねーじゃん』

「体調崩しちゃってさ……」

『風邪？』

「かも」

『マジか、やばいじゃん』

「なんか用？」

『どうしてるかと思っただけ。できたら会いたかったけど、その感じじゃ無理っぽいな。なんかほしいものは？』

「気持ちだけ受け取っとく。伝染しちゃ悪いし」

やんわり見舞いを断る。

『悪化する前にもいちど診てもらえよ、セカンドオピニオ

ンは大事だぜ』

「了解。また店で」

息絶え絶えに通話を切って突っ伏す。他のセフレにはLINEを回しといたんで大丈夫なはず。

空気を読まず着信。うんざり顔で受話器マークをタップ。

「板尾？ 会社は」

『土日？』

「忘れて」

『調子はどうだ』

「死んでる。頭がぼんやりしてやる気出ねえってか……」

『一週間は長いな。茶倉に安否確認の定期連絡入れてんの』

「俺がいねえあいだ片付けてえ用事があるとかで東北に旅行中」

看病の甲斐あってか次の日にはけろっとし、荷物をまとめて空港に急いだ茶倉を思い出す。

「好きで世話焼いた見返り期待すんのもおかしいけどさ、にしたって薄情じゃね？ 東北土産がっぽりふんだくらなきや割にあわねえ」

『なに催促したんだ』

「なまはげフィギュアときりたんぽ」

『またマニアックな』

電話の向こうで苦笑していた。

『イタコ勧誘すんのかな』

「俺がいんのに？」

『頼りねえし』

「謝って」

『すいません』

「許す」

『でもさく可愛い女の子の方がモチベ上がるし映えるのは真理じゃね？ 巫女服って萌えるよな』

「アシなら間に合って……」

咄嗟に否定しかけ、まんざらありえねー話じゃねえと考え直す。そもそも俺が役立ってるかどうか微妙な所で、足手まといのレッテル貼られたら反論できねえ。

『まあいいや。飲み会までにちゃんと治せよ、チャクラ王子のアドバイス欲しいし』

「まだマツチングアプリで彼女探すの諦めてねえの？」

『三十路前に結婚するのが目標』

「玉砕するたび愚痴聞かされる身になれよ」

十分ほどくだらない話をして通話を切り、市販の薬を飲んで寝転がる。

不幸中の幸いというべきか、緊急時に備えて買いだめしといた食料があるんで当分は困らねえ。フリーズドライのお粥にカップ麺、レトルト食品は偉大。

待てよ、冷蔵庫の中身は大丈夫だよな？

業務用スーパーでテンション上げて買ったブラックタビオカの賞味期限は……。

「忘れてた！」

ジャージの袖を捲って確認すりゃ、一粒残して真っ黒に濁ってる。

「帰りは明日……ギリギリイけるか」

元氣一杯な子供の声が届く。近くに公園があるのだ。

「パンツ干しっぱ……いいやほっとこ」

二十六歳独身ゲイのトランクスを好き好んで盗む泥棒もいねーだろ。てかアレ、茶倉のおふざけ誕プレだし。

「しーちゃんボールとってー」

「いくよー」

「あははっそつちじゃないよ！」

遠く近い子供たちの声を子守歌にまどろむ。汗に濡れたシャツが毛穴を塞いで気持ち悪い。肌は塩を吹いていた。

画面をタップし、茶倉とやりとりしたLINEを見返す。

メッセージの大半は近況報告。

昨日送信したメッセージには、一週間前から時々見るようになった夢のあらましを書いていた。

夢の中の俺は深夜の高架下を歩いている。トートバックを下げた若い女を尾行しているようだ。

言葉にしちまえばそれだけ、特段変わった現象は起きない。だけどやっぱり気になって、詳しく知りたがる茶倉に覚えたる範囲で話した。

茶倉曰く、夢で霊的メッセージを受信する事はよくあるらしい。俺が見たのが予知夢や正夢の類なら、あの人は現実にいるんだらうか。

スクロールでログ確認中、鼻先にコバエが飛んできた。

反射的に目をやり、シンクにたまった汚れ物の山にげんなりする。これ以上放置すんのはまずい。

だるい体を起こして台所へ行き、片手に持ったスポンジに洗剤をブツシユする。

「あ」

濡れた手が滑り、盛大に液体が零れた。

「おるか理一。入るで」

一時間後、茶倉がドアを開け上がり込む。

「え、なんで」

明日帰ってくるはずの友人のアポなし訪問に、当然理一は驚く。茶倉は

「旅行は明日までじゃ」

「数珠濁たゆうてたやん。日程切り上げた、感謝せえ」

「合鍵の場所は」

「郵便受けの底に貼り付けてあった」

「教えたっけ、忘れてた」

頬をかいてごまかし、洗濯物の山から救出した座布団をパス。キャッチした座布団を敷き、膝を畳む前に思い直す。

「フアブリーズは？」

「失礼がアルマーニ着て押しかけたような発言」

さも心外そうな洗面を作り、突っ立ったままの茶倉と座布団を見比べる。

「座んねーの？」

「靴下黴びそうやし遠慮するわ」

「へーへーご勝手に」

布団の上で両足の踵を突き合わせるように胡坐をかき、凶々しく催促する。

「土産は？」

茶倉が突き付けた紙袋の中身を検め、げんきんに相好を崩す。

「やった、本場のきりたんぽとなまはげファイギュアゲット」
なまはげファイギュアを枕元に飾り、きりたんぽを冷蔵庫にしまい、咳き込みながら戻ってくる。

「まだ治らんのかい。長いな、一週間やろ」

「熱は下がったぜ。東北はどうだった？」

「遊びに行つたんちやうで」

「違うの？」

「欲しいもんがあつたんや」

「笹かま？ ずんだ餅？」

「食い物から離れろ」

食いしん坊にツツコミをくれ、服や下着が脱ぎ散らかされた部屋を見回す。

「瘴気が濃んどる」

窓を開け放ち換気をすます。温かい陽射しと風が舞い込み、ペランダのパンツが間抜けにはためく。

子供のはしゃぐ声に交じり、赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

理一が忌々しげに舌打ち。

「うるせえなあ。ちゃんと躡けとけよ」

窓を閉じようと腰を浮かす友人に先んじ、茶倉が動く。

「!? ツぶ、」

黒い数珠を巻いた左手を拳に固めて振り抜き、理一の頬に叩き込む。

「な」

「黙れ」

無言のまま押し倒し、喉元を締め上げる。

「ちやく、ら、ぐ」

「移すで」

低く宣言する。

刹那、空気が豹変し日常が非日常に裏返る。

(以下続)